

たとえ親の顔を知らなくとも ルーマニアでエイズと闘う子供たち

浅井 淳子

映像作家

ヨーロッパの東、ルーマニアではたくさんの子供たちがエイズと闘っている。親の顔も知らず、赤ん坊の時から病院で育った孤児たち。その数は4,000人(死亡者を含む)を越え、ヨーロッパ幼児エイズの半分に匹敵する。

どうしてルーマニアの子供たちだけに、HIVが広まってしまったのか。本来元気に成長しているはずの彼らがこんなに苦しめられるのは、1人の独裁者が原因である。

社会主義時代、この国はチャウシェスク大統領が絶対の権力を持っていた。彼は国が豊かになるために、人口増加政策を打ち出し、「45歳以下の女性は、子供を4人産むまで中絶禁止」という政令を出した。しかし国には何もない時代、真冬でも電気・ガス・水道が止まってしまうという状況だった。親たちは已むを得ず、わが子を捨て、孤児院にはたくさんの赤ん坊が集められた。しかし孤児院にもミルクなどない。子供たちの多くがここで栄養失調となる。職員や医師たちは栄養補給という名目で、大人の血液を子供たちに輸血した。その中に HIV に汚染された血が混ざっていたのである。

また、注射針の使い回しや、HIV 感染者の存在を認めなかったチャウシェスクの政策も、感染を広げる原因となった。子供たちの年齢が、9歳、10歳に集中しているのは、1989年12月、チャウシェスクが処刑されたあの革命前に生まれた子が、大半だからである。詳しい内容は、『もっと生き

たいの』(凱風社刊)に書いているのでぜひ読んでいただきたい。

さて、この事実を日本の人々に伝えと、「いくら生活が苦しいからといって、わが子を捨てるなんて、ルーマニアの人はひどい人たちだ」という反応が返ってくる。

しかし何処の世界に、自分の身体を痛めて産んだ子を簡単に捨てられる国民がいるだろうか。水

も食べるものもない、その上秘密警察に監視された生活。将来に希望を持つことのできない人々が、身を切る思いで子供たちを捨てていったのである。物が溢れる生活に慣れてしまった私たちには、想像することもできない。

さて、エイズの子供たちに話を戻したい。革命後医師たちは、子供たちはすぐに死んでしまうだろうと思っていた。ところが予想に反し、多くの子供たちが今でも生きている。もちろん亡くなった子もたくさんいるし、重い病気に苦しむ子もいる。が、何年も前にエイズを発症しながら、今も元気に学校に通っている子も、実際にいるのである。それは海外からの薬や食物の支援によるものだ。子供たちの生活費の8割は海外支援に頼っている。ちなみに、日本は支援国の1位になった。

辛い病気と闘う子供たちの多くが、親の顔を知らないけれど、遠い外国に彼らを思ってくれる足長おじさん・お婆さんがいる……そう考えると少しだけ、悲しみが和らいでくる。

